冠攣縮性狭心症患者において心エコーで心臓腫瘍を発見した一症例

◎是永 愛[1)]、橋詰 澄夫[1)]、森 智美[1)]、川﨑 智香[1)]、下川 てるみ[1)]、齊藤 孝子[1)]
地方独立行政法人 堺市立病院機構 堺市立総合医療センター[1)]

【はじめに】心臓腫瘍のうちその約 30%が悪性腫瘍であり、その中で心臓原発の腫瘍は悪性中皮腫・悪性リンパ腫・肉腫などがあげられる。いずれも切除が第一選択となるが再発リスクが高く予後不良である。

【症例】50 代男性。主訴は 3 ヶ月前より続く労作時胸痛。前医で運動誘発性冠攣縮性狭心症と診断され投薬治療を開始されていたが、転居に伴い当院紹介となった。前医では心電図で前胸部の陰性 T 波、血中トロポニン I の上昇あり、冠動脈カテーテル検査で、有意狭窄を認めなかったが、Ach 負荷試験にて右冠動脈の狭窄、下壁誘導の ST 低下および胸部症状を認め、上記診断に至った。当院受診時、症状の改善が乏しいとの聴取あり、心エコー検査を実施した。

【検査所見】心エコー検査では、肺動脈弁直下に可動性のある 26×18mm の mass を認め、それによる右室流出路の狭窄があった。また、三尖弁逆流最大圧較差 87mmHg と高度右心負荷を疑う所見を認めた。心臓 CT では肺動脈本幹から左肺動脈に壁肥厚を認め腫瘍の浸潤を疑う所見が得られた。

【治療／経過】胸痛症状は右心負荷によるものと考えられ、また腫瘍の嵌頓が危惧されたため、準緊急的に腫瘍切除術および肺動脈パッチ形成術を行った。表面平滑な腫瘍が心室中隔から起始しており、肺動脈弁を介して肺動脈に一部浸潤していた。病理検査で intimal sarcoma の診断であった。術後、放射線治療を目的に他院紹介し、経過観察していたが、CT で肺転移が指摘され化学療法開始となった。その後、一旦消失したものの、再度、肺転移を認めそれによる下大静脈の圧排があったが、化学療法で縮小傾向を示しており、術後 2 年が経過したが、現在、職場復帰し独歩通院している。

【まとめ】今回、冠攣縮性狭心症の診断に対し、投薬治療で症状の改善が乏しいことを契機に心エコー検査を行い、心臓原発の右室内腫瘤を発見することができた。予後不良でありながら、手術、放射線治療、化学療法を併用し、現時点で概ね良好な経過を得ている症例を経験したので報告する。

連絡先：072-272-1199